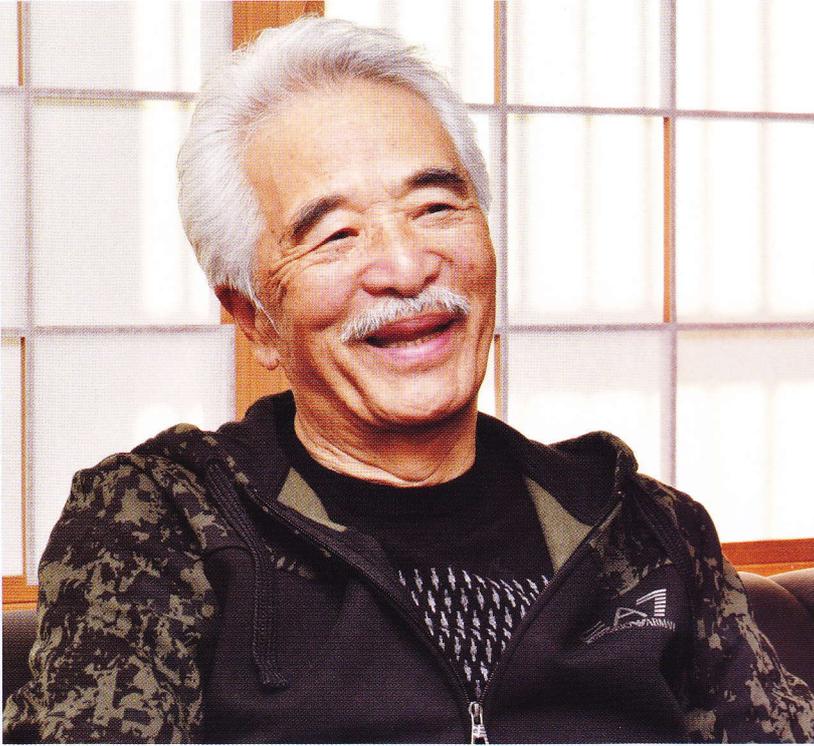


第3回 シンガー・ソングライター

さとう 宗幸さん＝1966年度卒

プロテストソング感化

さとう宗幸さん(69)＝1966年度卒＝は、ミリオンセラーとなった「青葉城恋唄」を作曲し、歌ったシンガー・ソングライターです。宮城県古川高校在学中、フォークソングに出合いました。街で歌うような環境がまだない黎明期でしたが、多感な高校時代の体験が後のプロ活動へとつながったようです。



入学して一番びっくりしたのは応援団です。昼、竹刀を持ってクラスに来た時の怖さはもう……。放課後は校庭の隅にみんな集められました。学校の門という門にはみな応援団がいて、よほどの理由がない限り、通さないというこわもてでした。あの練習は、いきなりの洗礼でしたね。

兄3人も古高です。特に4歳上の兄は質実剛健の校風そのまま、バンカラの極みでした。蛍雪の校章をつけた帽子に、紫紺の手ぬぐいを腰にぶら下げた兄の姿はあこがれでした。応援団のことも聞いていましたが、こんなにすごいものかと。どこかで妙な心地よさも感じていました。古高生になった実

感だったかもしれないですね。

スポーツは見るのもプレーするのも好きでした。古高の野球の試合はかなり熱が入り、一人で評定河原球場(仙台市)まで行ったこともあります。相手は仙台市内の学校で、100人、200人ぐらいの応援が来ていましたが、こちらは応援団も合わせて5人ぐらいでした。寒さも雨も吹き飛ばすように応援歌を歌い続けました。試合に勝った後、相手の先生か誰かが「みろ、向こうなんか数人で応援してるのに、おまえたちは何やってんだ」と叫んでいたのを覚えています。応援練習でたたき込まれた精神でしょう。

高校1年ぐらいの時、フォークソングの世界でプロテストソングが出てきました。毎日のようにベトナム戦争の記事が新聞に出た時代で、それに呼応しアメリカでも日本でも台頭したのです。ボブ・ディランとか高石ともやさんとかを聴きました。16、17歳の少年にとって、かなり感化されますよね。自分でもそういう歌を作りましたが、作品をひたすらノートに書きまとめるぐらいでした。歌を作っても、東京のように自分で歌うような環境がない田舎でした。



ギターを弾く古川時代のさとう宗幸さん(22歳)の提供

3年間マンドリン部において、NHK全国学校音楽コンクールに出ることが一つの目標でした。日本のフォークシンガーはアメリカのカントリーとかフォークをコピーして歌っている人たちが多く、部の仲間と「カントリーウエスタンでもやろうか」と4、5人で練習したことがあります。ただ、発表するまでには至りませんでした。日本のフォークソングは黎明期で、高校でディランについて語り合うことはなく、プロとして音楽を志そうと思っただことはみじんもなかったのです。でもけっこうそれなりに楽しく、音楽に関われた3年間だった気がします。

当時作った歌をコンサートで歌うなんて、恥ずかしくてできません。でも、生きている間に一度は「甲子園」で校歌を歌ってみたいという夢があります。

さとう・むねゆき

1949年、岐阜県旧土田村（現可児市）生まれ。51年、旧古川市（現大崎市）に転居。東北学院大卒。78年「青葉城恋唄」でデビュー。テレビドラマ「2年B組仙八先生」、「独眼竜政宗」、「裸の木」などに出演。95年からミヤギテレビ（仙台市）夕方の情報バラエティ番組「OH!バンデス」でキャスターを続ける。東日本大震災後、「びっきこども基金」をつくり、被災地の子ども支援を続ける。



古高小史③

歌い継がれる学校歌

古川高には、校歌をはじめ歌い継がれる学校歌がある。

「古中・古高百年史」（1997年）などによると、校歌は10（明治43）年、制定披露式があった。国語と英語の星合愛人教諭の作詞で「心の琴の絃も張る」で始まる。作曲は童謡「金太郎」「花咲爺」なども手がけた東京音楽学校（現東京芸術大）の田村虎蔵教授だった。「第二校歌」とも呼ばれる「図南歌」は42年、卒業記念として在校生が作詞し、物理の藤井清教諭が作曲した。

100周年記念CD「校歌・応援歌」には、校歌をはじめ野球の試合中に歌う「野球部歌」、勝った後の「凱歌」など東京混声合唱団の歌で計8曲がおさまる。収録にあたった同合唱団参事で在京同窓会副会長の曾根研一さん（82）＝54年度卒＝は「鼓舞するような校歌、哀愁を帯びた図南歌……。旧制中・高校の）寮歌のような旋律に乗って肩を組んで歌う感じの曲です。現役の学生から卒業生まで一緒に歌えます」と語る。



試合に勝ち、全力で校歌を歌う古川高野球部。秋田市のさきがけ八橋球場で10月14日、滝沢一誠撮影